

スウェーデンにエレン・ケイを訪ねる旅 (2014年9月5日〜12日)



平塚らいてうの会が呼びかけ富士国際旅行社で実現した今回の旅は、25人の参加者で期待以上の充実としたものとなりました。それは、企画を丁寧な詰めて下さった「会」と旅行社の担当者の方皆さん、現地での素晴らしい案内人高見幸子さんに負うところが大きいものでした。また、

関東、長野、

北海道からの参加者の皆さんは、家庭、地域で多彩な仕事や研究を積み重ねてこられた方たちで、この皆さんの力もまた旅を豊かなものにしたのでした。

ストランド荘を訪ねる

9月7日、古都ウプサラ



にウプサラ大学を訪ね、次の一日をかけてバスとヨータ運河のクルージングを楽しみながらヴェッテルン湖の湖畔の町モターラに到着、翌日の9月8日、いよいよエレン・ケイの記念館ストランド荘に向かいました。バスで2時間半走り到着。あいにく雨模様のお天気でしたが、森の中を湖に向かって進んでいくと、ストランド荘は太陽の光のモチーフの木製の門で私たちを迎えてくれました。かなり急な坂を下ってヴェッテルン湖のすぐのところ、ストランド荘はありました。入り口には、

エレンケイ財団の理事長で、ストランド荘の館長でもあるヘッダ・ヨーンソンさんが出迎えてくださいました。金髪の豊かな体格の中年の婦人でした。

最初に一階の応接室や台所、食堂など今も使われている部屋を案内していただき、太陽の光を取り入れる工夫のある窓などに感心しながら、二階に上がりました。二階にはゲストハウスとして使うための部屋がいくつかと、村の子どもたちのための図書コーナーがありました。また、ここを当初からストックホルムで働く職業婦人が休暇を過ごす場所として考えていて、現在も四人が二週間交代で利用しているそうです。湖側の金属製の仏陀のドアたたきのあるドアを開けるとそこは、ヴェッテルン湖が眼前に広がる息をのむ美しい眺望のテラスになっていました。目の前の景色は異なるものの、らいてうの家のテラスを思い出し、自然への愛が二つの家に共通しているようでした。

書斎の奥は、ケイのベッドと書き物机の置かれた明るい広い部屋になっていました。ケイの最もプライベートなこの部屋で、私たちはケイについてのヘッダさんの話を聞くことができました。それに先立って折井美耶子さんが要領よくらいてうの紹介をされ、日本から持参した『青鞥』に、らいてうが訳した「恋愛と結婚」のコピーや、らいてうの会の資料などをお渡ししました。

ここで、ケイについて語られたいくつかをあげてみると、一つは、父の農業経営が失敗して経済的自立を余儀なくされたとき、ケイは女性の友人と二人で宗教を科目に入れない革新的な学校を作

り20年間教師として働いたこと、当時教師は学校内に住むことが条件づけられたため結婚が不可能だったこと、後援者たちからの奨学金によって教師を辞め、1900年に作家として自立、『児童の世紀』は13か国語に翻訳され国外でベストセラーになるなどして収入を得た。執筆活動の期間には、イタリア、イギリス、フランス、ドイツなどに住んだが、60歳になって幸せだった子ども時代のような家を作り、穏やかに暮らしたいと願いストランド荘を建てた。家の設計や内部の装飾も殆ど自身で行った。敷地は国から借りていたが財団で買い取り、運営資金も現在に至るまでケイの個人資金による。ケイの親族も当初から現在に至るまで運営に大きく寄与している、などでした。

また、最近の新しいフェミニズム運動の中で、



ケイは再評価される動きがあり、ストランド荘も太陽を採り入れ家族を大事にする家として注目されている。ケイについての国際的な研究団体も作られていて日本からも参加をとの呼びかけもありました。

ケイは国際的な友人のネットワークを持っていて、アメリカの友人やフランク・ロイド・ライトとともに日本を訪れる計画を持っていたということでした。事故によって実現しませんでした。もし実現したららいてうとケイが日本で会って

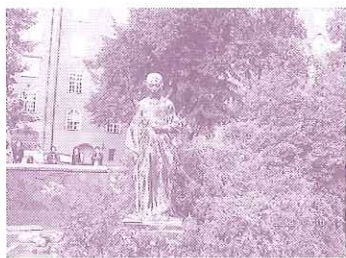
たかもしれません。ケイに東洋への共感があつたことを知ることができました。「原始女性は太陽であった」の言葉がうれしいとのヘッダさんの言葉を胸に、ストランド荘を後にしました。

ケイの生家を訪ねる



9月9日、モターラから東へ走ること二時間マレン湖畔の生家を訪ねました。美しい馬たちの育成牧場の奥に湖に囲まれて白い美しい家が建っていました。現在の居住者はお留守のため家の内部を見ることはできませんでしたが外の見学許可は

いただいたのでゆつくりと見学することができました。湖で泳ぐための小さな桟橋がありそのわきの彼方には白鳥が一羽泳いでいました。三方を湖に囲まれた予想をはるかに上回る美しさで、ケイの気持ちが良い理解できました。そのあと4時間近くバスに乗ってストクトホルムにつき、エレン・ケイの銅像のある公園に向かいました。公園の奥にエレン・ケイのややうつむいた銅像が立っていました。花壇の花に囲まれ足元には池があり「エレン・ケイ公園」の看板もあり、ベンチに憩う人もいて小さいけれど生き



ている公園でした。走りについてエレン・ケイに近づけた気のするこの旅ですが、高見さんの語るスウェーデンをご紹介できなかったのが心残りです。旅行の参加者の方からのご報告も今後出されることと思いとあえずの旅のスケッチです。 (三留 弥生)

7月28日

らいてうの家で
サクソフォンを聴く

真田らいてうの会 塚田 禮子

闘病中の私の願いは、生の音楽を聴きたいということでした。外出ができるようになり、図らずとも中川美保さんのサクソフォンの演奏の会にさそっていただきました。



当日、始めて見た楽器は大きく、きらびやかで、木管楽器と金管楽器の良さを兼ね備えた楽器であることを知りました。その音色は力強く圧倒的な存在感を示し、それを奏でる指先は繊細でしなやかに動き、ふと外に目をやると、木洩れ陽に射す森が光り、心地よい風が吹き、しきりに啼く鶯と蟬の声と響くサクソフォンの音が重なり、まるで別世界にいるような感動を覚え、涙が溢れました。帰りは木村さんの案内で樹齢三百年のシナの木の色と香りに生命力を感じ、こんな羨えた私にも音楽や自然に感動する力が残っていた喜びを味わい、生かされて良かったしみじみ思った一日でした。

子ども祭り

あずまや高原にフルートの音響く

8月9日(土) 薬草の森りんどうで、恒例の「あずまや高原子ども祭り」を実施しました。若いお母さんや子どもたちが大勢参加してもらおうと、西アフリカダンスグループ「サブニユマ」の出演、小中学校の生徒たちが大和田葉子さんのフルート演奏に合わせて演奏する会など、新しい取り組みを計画しました。しかし残念。大型台風直撃の情報で子どもたちは大事を取って参加を見送った人も多く、またアフリカの太鼓はぬれると革が破れる危険ありで、取りやめになるなどアクシデントに見舞われました。

それでもしつとりと落ち着いたフルートの演奏(お弟子さんも含め4名の演奏) 加えて佐々木さん夫妻の手のパフォーマンスもあり、賑やかな開催となりました。お楽しみのにらやきせんべい、ポップコーンも美味しく、おむすび、お焼きも出て、心もお腹も満足の一日でした。



台風にもめげず大人35名、子ども5名の参加。天候の影響で子どもたちの参加が少なく残念でしたが、若いお母さんや子どもたちの参加を目指したこの取り組みは今後も大事にしていきたいと思っています。皆さん来年も是非ご参加ください。

(若尾 伸子)

日本母親大会2014 特別企画 ビッグてい談

婦人民主クラブ・内田ユリコ

「世界から見たアジアと日本」。語るのは符祝慧（フー・チュウウエイ）さん、畑田重夫さん、海南友子さん。コーディネーターは古屋和雄さん。元NHKアナウンサーの古屋さんが、安倍政権、日本国憲法、集団的自衛権、天皇明仁、「慰安婦問題」など、たくみになげかけ、三人が縦横に語って会場を沸かせました。

戦争責任から逃げる日本

符さんはシンガポール「聯合早報」紙日本特派員。「日本はほんとにアジアの中にあるのかな?」と思う。戦争責任から逃げ続け、アジアから見ると反省しなかった。このままではまた世界の中で孤独の道を歩き続ける。日本のPKO（国連平和維持活動）では、シンガポールの新聞に『日本の自衛隊の掃海艇が来る』と出た。買い物に行った祖母は、魚屋さんに『自衛隊が来ると、無くなるから、早く買って』と言われ『日本軍がまた来る』と怖がっていた』などと話しました。



国際政治学者の畑田さんは「日本では『終戦』といい『敗戦』していない人がまだいる。A級戦犯たちが政界、財界に居続けた。戦争は、死なない者と儲かる者がやりたがる。今も安倍首相の外遊に経済界が同行している」と怒ります。「学習は行動の源泉」「元気の素」「憲法と戦争体験の話して日本中を行脚する」「安倍首相をそのままにして死ぬわけにはいかない。頑張ろう!」という畑田さんの九十歳という年齢に感嘆の声が上がりました。

問題を多角的に学習すること

海南さんは、元NHKディレクター。「戦前、戦中の反省から『国営』から『公共』になったと最初に習った。戦争と差別に反対しなくてはジャーナリストではない。職場には小さな圧力は日常的にあった。番組別に視聴者からの電話の一覧が貼ってある。休まずに作った番組に反応がないと辛い。はがきでもFAXでも視聴者の反応で番組が変わる。退職してドキュメンタリー映画監督になった。福島取材中に妊娠を知り、東京から京都に移り、子どもを育てている。原発事故で移住、避難している女性のほとんどが3・11までは社会に無関心。苦しい体験から秘密保護法、集団的自衛権に目が行くようになり、目覚めた女性たちがいろいろな活動をしている」などと語りました。問題を多角的に学習すること、外から日本を見ることなど改めて教えられました。四人の講演を聴くような分科会で、短く感じられる充実したお話でした。

【事務局日誌】

- 7月1日 会の将来プロジェクト会議
- 7月5日 らいてう講座I「らいてうとエレン・ケイ」講師・折井美耶子副会長（らいてうの家にて）
- 7月22日 第3回理事会開催
- 7月28日 中川美保サクソフォンコンサート（らいてうの家にて）
- 8月3日 あずまや高原自治会「消防訓練と懇親会」に参加（あずまや高原ホテル）
- 8月6日 らいてう関係資料整理打ち合わせ
- 8月7日 スウェーデン旅行説明会（於富士国際旅行社）
- 8月9日 こども祭り（於葉草の森りんどう）
- 8月14日 会ニュース編集会議
- 8月22日 スウェーデン社会研究所長・須永さんのお話を聞く会（於富士国際旅行社）
- 9月5日～12日 スウェーデン旅行出発
- 9月17日 会の将来プロジェクト会議（午前）
- 9月20日 第1回常任理事会（午後）
- 9月20日 らいてう講座II「紫式部からのメッセージX」講師・宮島満里子さん（らいてうの家にて）
- 9月25日 第5回らいてう資料研究会

訃報 真田らいてうの会の半田真紀子さんが6月11日逝去されました。「家」の当番などで力を発揮されていました。ご冥福をお祈り申し上げます。